

ヨーロッパ建築といえば、古くは古代ギリシャ様式のパルテノン神殿やゴシック様式のケルン大聖堂、バロック様式のヴェルサイユ宮殿などが挙げられるが、それらはいずれも重厚な石造建築である。以前、私が出向していたフランス・パリ郊外（アントニー市）にある天理教パリ出張所（当時）も立派な石群で造られていた。建築技法でいえば、西洋は石造、東洋は木造という偏った見方がある。しかし、現在のヨーロッパに多く見られる石造建築から石の文化だと一種の思い込みをしているヨーロッパ諸国にも実は伝統的な木造軸組構法が存在し、木材文化が今なお脈々と受け継がれているとしたらどうであろう。

本書は、「古代から現代に至るまでの広範な木材利用の歴史と、これと表裏一体となる人間と森の関係の歴史」が描かれており、「ドイツを中心とするドイツ語圏諸国だけではなく、ヨーロッパやアメリカ、さらには、日本、中国、インド、ネパールにまで視野を広げて、人間と木材、そして森との相互の交わり、つきあいの歴史を丹念にたどった」労作であり、2段組約350頁の大著である。

著者は、現代のドイツを代表する環境歴史学者の一人、ヨアヒム・ラートカウ(Joachim Radkau 1943～)である。本書は、原著 Holz—Wie ein Naturstoff Geschichte schreibt (原題「木材—自然原材料はどのように歴史をつづるのか」)の改訂増補版として刊行されたものの訳書である。

本書は、まず、ヨーロッパを舞台にした人間と木材・森との関係を中心に壮大なスケールで描いた歴史の序章が示されている。木材は、太古の時代から唯一の燃料材であった。同時に、建築資材や製品製造材料の原材料として、また、ガラス製造や製塩、製鉄業などのエネルギー源としても欠かせないものであった。生業などの燃料として消費し続けていた木材は、建築資材や製品製造としての木材よりも重宝がられていた。実に木材は、その「9割が19世紀まで燃料として消費されていた」のである。木材売買という利権は、王権によって独占され、木材消費は造船や製塩、製鉄業を中心にさらに加速していく。そして、木材資源を巡る動きはヨーロッパ諸国へと広がっていくことになる(第一章)。

木材を巡る争いは、領主と農民等の間で森の所有・管理にも波及した。農民にとって森は、豚の放牧地でもあったからだ。森での豚の飼育は、「木材の約20倍のお金をもたらしていた」ことで、王侯貴族の間で「豚戦争」に発展することもあった。一方、ヨーロッパ各地では大聖堂の建築をはじめ、16世紀以降海洋貿易が飛躍を遂げることで、ナラ材の大量交易需要が一層の高まりをみせる。森はますます荒れ果て、木材飢餓の様相を呈することになる。ドイツでは木材の節約は以前から頻りに呼びかけられていた。資源の有効活用を促す意味では現在でいう「もったいない」に通じているかもしれない。木材の伐採を規制したフォルスト条令もまた、木材資源の枯渇に歯止めをかけようとするものであった(第二章)。

イギリスが震源地となった産業革命が世界的に広がることで時代の主役は木炭から石炭へ、木材から鉄へとその変化を速めていく。工業化が進むのと比例するように「燃料として、道具

や機械の材料として使われていた木材」需要が衰退していくのは自然の流れだったように思える。しかし、著者は「木の時代の終わりは、決して産業革命の始まりと同じではない」、工業化の始まりは「木材と結びついた技術の頂点をもたらした」と主張する(第三章)。高度工業化時代を迎え、森の経営に苦慮する中、新たな「木の時代」を巡って、その未来像を模索していく。それは、「原発や化石燃料に代わる再生産可能なエネルギーとしての木材利用などに代表される木材のルネッサンス、木材や森を巡るエコロジーとエコノミーの齟齬に揺れる現代社会の実相など」今日的な課題となっている(第四章)。

さらに第五章では、アジア諸国の事例が取り上げられている。これまでの森の管理について、国の森林官僚が行ってきたドイツと違い、日本では森の周辺に住む農民が日常生活の一部として行ってきたこと、ネパールが1956年から翌年にかけて森を国有化したことで、その後危機的状況を招いたことなどが印象深い。ともあれ、木材にエコロジーとエコノミーの融合の可能性を見出そうとする本書の分析は、森林問題を抱える日本に多くの示唆を与えてくれている。ぜひ一読をお薦めする。

本文の構成は次の通りである。

第一章 歴史への木こり道

「木の時代」

「人間と森—歴史を物語る数々の歴史」

「歴史の変遷における木材の自然としての本性」

第二章 中世、そして、近世の曙—蕩尽と規制の間にあった木材資源

「森の限界に突きあたる中世社会」

「建築用木材と様々な用途の木材」

「薪の大規模消費者の勃興と第一波のフォルスト条令」

第三章 産業革命前夜—「木の時代」の絶頂と終焉

「改革、革命、そして、木材業」

「木材飢饉という亡霊」

「森—生活の空間から資本へ」

「木材の消費者」

「しだいに押しのけられる木材」

第四章 高度工業化時代—材料への変質と木材のルネッサンス

「森—工業化の時代の経済の原動力」

「木材工業における技術革命」

「断絶を招く原材料、つなぎ合わせる手段」

第五章 国境を越えて見る—西欧文化以外における木材と森の生業

「グローバルな視野とコントラスト—アジア諸国の事例」

「相剋と(自称の)解決策」

「翻って将来を展望する」

